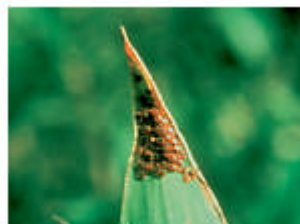
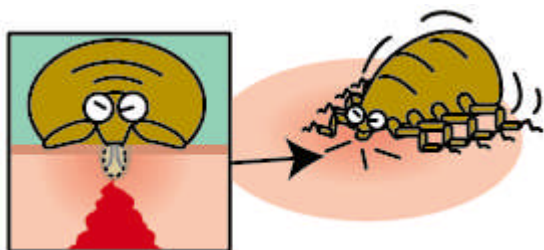


## ライフ・スキル講座:9



葉っぱの先端で寄生する機会を待つフタトゲチマダニの幼マダニ



ヤママダニ  
大きさ(未吸血時):オス3.2mm メス2.3mm  
分布:屋久島以北の日本全土(特に東北、北海道に多い)



シウルツェマダニ  
大きさ(未吸血時):オス3.2mm メス2.5mm  
分布:北海道～東北地方、中部山岳地帯に多い

## ダニ、ハチ、虫、草にご注意

名寄はとても自然が豊かな土地です。さあ！！ 名寄の自然の中へ・・・でも、そこにご注意！豊かな自然だから危険も潜んでいます。そこにはダニ、虫、草が待っています。それぞれについて注意点を説明します。

**あなたをダニが待っている。**

ダニは草むらに隠れ葉っぱの上でヒトや動物が通りかかるのを待っていて、通りかかると取り付きます。草むらに入るときには、必ず長ズボン・長袖シャツ着用で、履物はサンダルなど皮膚が出るものは避け、帽子、軍手をつけることに注意しましょう。蚊取り線香や昆虫忌避スプレーも効果があります。ダニはいろいろな病原体を持っていて、刺されることがライム病やQ熱の原因となることがあります。もし、刺されていることに気が付いたら、自分で取らないで(単に引っ張ると頭の部分のみ残ってしまう)保健福祉センターや医療機関に相談して下さい。

病名	感染する動物	症状
ライム病	犬・人 (ズノーシス)	発熱、全身性けいれん、起立不能、歩行異常などが単独あるいは複合して現れます。
Q熱	犬・人 (ズノーシス)	急性の場合:高熱、頭痛、悪寒、関節炎、眼痛など。進行すると気管支炎、肺炎、髄膜炎などが現れ、死に至ることもあります。 慢性の場合:疲労感、慢性肝炎、心筋炎など。うつ病などの精神的な問題と間違われやすい。ワンちゃんには感染しても症状が現れません。
エールリヒア症 (エーリキア症)	犬・人 (ズノーシス)	高熱、免疫力の低下、筋肉痛、頭痛など。2～3%の確率で死に至るケースもある新興感染症。 犬も人も、病原体の種類によって重篤な症状を起こすケースとそうでないケースがあり、まだ不明な部分もたくさんあります。

## スズメバチは最も危険。

刺されたらアナフィラキシーショックで死亡する可能性があります。また、他のハチよりはるかに強烈な毒液を持っています。刺されなくても、散布された毒液に触れるだけで、目に入れば失明し、皮膚に触れれば炎症を起こします。巣の10m以内に近づくと攻撃してくる可能性がありますので、とにかく危険なヤブ、シゲミには近づかないことです。また、香水や黒い服装にも反応して攻撃的になるといわれています。

万が一刺されたら、毒液を搾り出すか、洗って、とにかく早く医療機関を受診してください。2回目以降ほどアナフィラキシーショックの症状が強く出ますので、1度でも刺されたことがあり、夏や秋に山や森に出かけなければいけないときには、医療機関に相談して、アドレナリンを主剤とした自己注射薬のエピネフリン製剤（エピペンなど）を携帯しておくことも必要です。ただし、一時的に症状を緩和するだけですので、その後、急いで医療機関を受診する必要があります。

## 草にもご用心。

野外の草原や山の中にはウルシなど触って汁がつくと皮膚炎を起こすものがあります。気がつかないうちに触っていることがありますので、野外活動に出るときには半袖、半ズボンはとても危険です。また、かぶれている事に気がついたら、そのままにしないで、炎症を抑える軟膏やクリームをある程度良くなるまで使うことが大切です。そのままにするとどんどん悪くなる場合があります。

## 虫刺されにご注意！

夏の屋外にはハチ、カ、ブヨ、ヌカカ、マダニなど、小さいのに憎いやつがたくさんいます。

### 【虫刺されの予防】

夏の屋外活動には、長袖、長ズボン、ソックス、運動靴を用意しましょう。水辺のリゾートも水から上がったなら服を着て虫刺されを防ぎましょう。肌が露出する部分には、防虫スプレー、ハッカ油（着衣に少量スプレーする）などの虫除けを活用しましょう。

### 【虫に刺されたら】

赤くポチッと腫れてちょっとかゆくなる程度なら、搔かないようにして治まるのを待ってもかまいません。でも、次のような場合には放っておかず、医療機関を受診しましょう。放っておいても治らない場合の治療は内服（お薬を飲むこと）です。

- ・以前ハチやブヨに刺されて強く腫れたことのある人が次に刺されたとき。
- ・とてもたくさん刺されたとき。
- ・かゆみ止めの塗り薬ではなかなか治まらないとき。
- ・刺されたところが大きく腫れあがったとき。

**急激に腫れてきたら冷やしながら受診を。休日なら当番医へ**

### 【名寄に来て2年目以降は要注意】

前年に刺されたときに体内にできた抗体によって、アレルギー反応が強く出ることがあります。いつも大丈夫だったから、と思わず、早めに治療しましょう。

（播本、大見）